

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23242002

研究課題名(和文) 共感から良心に亘る「共通感覚」の存立機制の解明、並びにその発現様式についての研究

研究課題名(英文) The elucidation for the mechanism of common sense, that extends from sympathy to conscience, and a research on its emergence

研究代表者

栗原 隆 (KURIHARA, Takashi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：30170088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 33,500,000円

研究成果の概要(和文)：「気分」と訳されてきたStimmungが、主観的なものというより、「感応」として間主観的な働きをすることを解明、カントやシェリングそしてヘーゲルの美学にこの「感応」の脈路を探索することを通して、この「感応」を軸に、新たな人間学を構築することを試みた。

ドイツ啓蒙主義の時代に「経験的心理学」や「人間学」の膨大な試みが出版されていたことを確認、それらの読解・分析を通して、ラインホルトやフィヒテも、「経験的心理学」と対峙する中で自らの思想を形成するとともに、シェリングやヘーゲルらの自然哲学には、経験的心理学や人間学に由来する問題意識を、哲学的に知へと構築する試みを確認することができた。

研究成果の概要(英文)： This research elucidates the mechanism of Stimmung (mood), that is neither subjective nor personal. It works really intersubjectively between not only person and person, but also man and nature, moreover rules the atmosphere of the place. We confirm that we can constitute new anthropology and aesthetics on the basis of the Stimmung.

We find that at the time of German Enlightenment appear many publications for empirical psychology and anthropology in prints. Reinhold and also Fichte constructed their philosophical systems against empirical psychology. We discovered in Schelling's philosophy and Hegel's philosophy common idea brought about the empirical psychology and anthropology. Our studies clarify deep realm of unconsciousness under the philosophical knowledge, which is the origin of our creative faculties.

研究分野：哲学

キーワード：共感 良心 感応 構想力 無意識 創造力 人間学 美的判断

1. 研究開始当初の背景

近世哲学が依拠した主知主義的な知が、個人主義的な高みを目指す一方で、共感の絆を育むことは等閑視されるとともに、知の根底にある感情や感性、さらには無意識の領野の働きの豊かさや創造性の解明は、哲学で試みられることは、これまでは少なかった。こうした認識に基づき、共感や感応という情動的な働きによって人間がむしろ他者との交感へと開かれる理路の解明にあたる必要があると考えた。

これは、科学研究費補助金(基盤B)「空間における形の認知を介した『主体』の存立の基底に見る感覚の根源性についての研究」(課題番号20320003:平成20年~平成22年:代表・栗原隆)による共同研究を通して、「主体」に閉ざされない感覚の拡がりについて、認識を新たにしたことによる問題設定でもあった。

2. 研究の目的

スコットランド啓蒙派にあって「常識・良識」を意味した「共通感覚(common sense)」が、ヒュームやスミスにおける「共感(sympathy)」と輻輳しつつ、審美的判断を支える「共感」としてカントに、倫理的判断を支える「良心」としてヘーゲルにまで波及した思想史的脈絡とその発現様式を明らかにすることが研究開始時の目的であった。従って、カント美学やヘーゲルにおける絵画論や良心論の解明にあたることになった。

さらに、共感の存立機制を探究する中で、感情に根差してこそ精神的な紐帯が構成されることを解明することを通して、「共生」の成立根拠を究明することが目指された。これは、東日本大震災以後の世のなかで、「心を繋ぐ」「故郷に生きる」という具体的な問題の哲学的な解明に繋がることになった。

そこからの問題展開として、シェリングやヘーゲルにおいて見られる「生に満ちた自然」の発想の淵源を探究することが、研究期間内の最終目的となった。これによって、『ヨハネの福音書』やグノーシス、そしてプロティノス、さらにはジョルダナーノ・ブルーノにおいてみられる生の思想が、どのようにしてドイツ観念論へ流入したかについて解明する、大規模なテーマ設定となった。

3. 研究の方法

近年、膨大な文献が公開されることになったGoogle Booksに、思想史の欠落部分を埋める文献を求め、これによって、イギリス経験論とスコットランド啓蒙派、さらにはドイツ観念論にまで及ぶ「共感」の概念史を描出することから始まった。さらには、バウムガルテンからカントやシェリングを経てヘーゲルに到る美学の成立を、「構想力」論と併せ捉えることによって、美学を感性論として捉え返す可能性に想到した。

ヘーゲルが絵画論を構築するきっかけと

なった、ドレスデンやウィーン、さらには、ケルンやアムステルダム美術館を訪ねて、実際にヘーゲルが接した絵画作品から哲学・美学的な絵画論を組み上げるためにはどのような契機が必要であるか、理念の顕現する場で考察を深めた。その結果、瞬間の姿を留める美術作品にあっても、文学作品のように、時間の継起に基づいている「物語性」を捉えることができる作品に対する評価の高いことを明らかにするとともに、それが、結局のところ、ヘーゲル的な知の成立の構造と通じ合うものであるという結論に到った。

研究内容が国際水準を担保できるように、国際シンポジウムを設定して、共同研究の国際発信に努めた。

4. 研究成果

従来は「気分」と訳されていたStimmungが、個人的かつ主観的なものというより、「感応」として間主観的な働きをすることを解明、カントやシェリングそしてヘーゲルの美学にこの「感応」の脈絡を探索することを通して人間同士はもとより人間と自然との交感に際しても重要な働きをすることを究明するとともに、この「感応」を軸に、新たな人間学を構築することを試みた。

ドイツ啓蒙主義の時代に、ドイツ観念論に先駆ける形で、「経験的心理学」や「人間学」の龐大な試みが出版されていたことを、公開されたGoogle Booksで確認。それらを解読することを通して、ラインホルトもフィヒテも、「経験的心理学」と対峙する中で自らの思想を形成するとともに、シェリングやヘーゲルらの自然哲学には、経験的心理学や人間学に由来する問題意識を、経験的ではなく哲学的に知へと構築する試みを確認することができた。

カントやシェリング、さらにはヘーゲルの「美学」の成り立ちを、「構想力」論と併せて検証することを通して、美学の感性論的転回とも言うべき、新たな可能性に想到した。これにより、「感性論」の豊かな可能性を哲学として樹立することができる見通しがついていた。

ヘーゲルやシェリングにあっては、知の成り立ちの根底には、知以前の、概念的に未分化の想念・心像の貯えられた無意識の領野が想定されていて、その無意識の領野が創造力を発揮する根源であることを究明するとともに、心胸の内なる故郷の拠りどころも、知の基底をなす無意識の領野にあることを確認、倫理的な判断や審美的な判断の根源であることを明らかにできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計23件)

栗原隆「心の深処と知性の豎坑　ヘーゲル『精神哲学』の改訂を視野に入れ」(東北大学哲学研究会『思索』第47号、117～134頁、2014年、招待論文)

栗原隆「ファンタジーの射程とムネモシユネーの深み　夜と泉をめくって」(日本シェリング協会『シェリング年報』22号、招待論文、59～71頁、2014年、招待論文)

栗原隆「ドイツ観念論におけるスピノザ主義　ヘーゲルの、失われた『フィッシュハーバー批評』、『ヘルダー批評』に照らして」(岩波書店『思想』1080号、180～199頁、2014年、査読なし)

座小田豊「無限性と否定性　ヘーゲル「イエーナ体系構想」における「精神哲学」の成立について」(東北大学哲学研究会『思索』第47号、1-24頁、2014年、招待論文)

伊坂青司「シェリング芸術哲学における造形芸術　彫刻と絵画の位置づけをめくって」(東北大学哲学研究会『思索』第47号、49～68頁、2014年、招待論文)

佐藤透「運命論的語りの構造に関する試論」(東北大学哲学研究会『思索』第47号、157～176頁、2014年、招待論文)

尾崎彰宏「レンブラントのスペクタクル—「受難」連作に「情念」の絵画化の射程」(『西洋美術研究』19号、2014年、査読あり)

鈴木光太郎「ボナテールのアヴェロンの野生児」(『人文科学研究』、135輯、1-30頁、査読なし)

小田部胤久「美学の生成と無意識— 三つの系譜に即して」(『思想』4月号、81-96頁、招待論文)

小田部胤久「Auffassung / Zusammenfassung / Zusammensetzung / Darstellung—カント『判断力批判』における「構想力」について—」(『美学芸術学研究』32号、2013年、査読なし)

Tanehisa OTABE „Japanese Aesthetics seen from an Inter-Cultural Perspective“ in: *Diversities in Aesthetics: Selected Papers of the 18th Congress of International Aesthetics*, (ed. by Gao Jianping and Peng Feng, Beijing, July 2013, pp. 417-428. 査読あり)

Akihiro OZAKI, *Painted Images of Chinese Porcelain -Symbols of Holland as Seen in Still-Life Paintings-* in: *Art History(Bijyutushigaku)*, 34, pp.1-12(2013年、査読あり)

尾崎彰宏「17世紀オランダ美術に描かれた女性たちをめくって」東北大学大学院文学研究科出版企画委員会編『男と女の文化史』(東北大学出版会、pp.163-207、2013年、査読あり)

佐藤透「原子力時代における科学者の倫理的責任」J. フォージ『科学者の責任 哲学的探求』を中心に」(『フィロソフィア・イワテ』第45号、岩手哲学会、pp. 45-59、

2013年、査読なし)

栗原隆「スピノザにおける無限性とヘーゲルにおける自己関係」(日本ヘーゲル学会『ヘーゲル哲学研究』vol.18、62～76頁、2012年、招待論文)

栗原隆「自然と生命　シェリング『自然哲学の理念』に寄せて」(東北哲学会『東北哲学会年報』No.28、93～108頁、2012年、査読あり)

小田部胤久「『無意識』をめぐるヘーゲルとロマン主義　美学(史)の立場から」(『ヘーゲル哲学研究』第18巻、2012年12月、46-57頁、招待論文)

Tanehisa OTABE, „Der „Grund der Seele“. Über Entstehung und Verlauf eines ästhetischen Diskurses im 18. Jahrhundert“ in: *Proceedings des XXII. Deutschen Kongresses für Philosophie „Welt der Gründe“*, (Hamburg 2012年10月, S. 763-774, 査読あり)

山内志朗「中世存在論におけるプラトニズムと超越概念」(『中世思想研究』第54号、pp.140-151、2012年、査読あり)

座小田豊「「人間として」問いかけること」(『今を生きる　東日本大震災から明日へ第1巻 人間として』(座小田・尾崎編、東北大学出版会、　　頁、2012年、査読なし) 21: 座小田豊「精神の生活　「喪われた者たち」の「記憶」と「ふるさと」の根源的な力について」(『今を生きる　東日本大震災から明日へ第1巻 人間として』(157-185頁、査読なし)

22: Takashi KURIHARA „Die auf die Vorstellung ode rein Paar Elefanten gestützte Welt und das System der Philosophie.“ (in: *Logik und Realität — Wie systematisch ist Hegels System ?* hrsg.v.Christoph JAMME u. Yoichi KUBO, S.57-68 : 2012年、招待論文)

23: Tanehisa OTABE, „Wann spricht die schweigende, wann schweigt die sprechende Natur? Schellings Kunstphilosophie und die romantische Kunstauffassung“ in: *Christian Danz und Jörg Jantzen (Hg.), Gott, Natur, Kunst und Geschichte. Schelling zwischen Identitätsphilosophie und Freiheitsschrift*, 2011 Wien, S. 103-114, 招待論文

[学会発表](計6件)

栗原隆「心の深処と知性の豎坑　ヘーゲル『精神哲学』の改訂を視野に入れ」(2014年7月5日、日本シェリング協会第23回大会、立命館大学)

栗原隆「物語の外在化と心の表出　ドレスデン探訪に寄せて、ヘーゲルにおける絵画論の成立を考える」(2014年5月31日、美学会東部例会、東京藝術大学)

小田部胤久「感性論としての美学から見た

カント『判断力批判』(2014年5月31日、美学会東部例会、東京藝術大学)

栗原隆「ファンタジーの射程とムネモシユネーの深み 泉と夜をめぐって」(2013年7月5日、日本シェリング協会第22回大会、新潟大学)

栗原隆「若きヘーゲルと心理学」(2013年5月12日、日本哲学会第72回大会、お茶の水女子大学)

栗原隆「スピノザにおける無限性とヘーゲルにおける自己関係」(2011年6月18日、日本ヘーゲル学会第13回研究大会、お茶の水女子大学)

〔図書〕(計10件)

座小田豊・栗原隆(編)『生の倫理と世界の論理』(東北大学出版会、2015年3月、全338頁)

栗原隆(編)『感性学 触れ合う心・感じる身体』(東北大学出版会、2014年、全312頁)

座小田豊(共著)『防災と復興の知:3.11以後を生きる』(大学出版部協会、79頁、2014年)

栗原隆(編)『感情と表象の生まれるところ』(東北大学出版会、2013年、全234頁)

単著:尾崎彰宏『ゴッホが挑んだ「魂の描き方」 レンブラントを超えて』(小学館、191頁)

栗原隆(編)『世界の感覚と生の気分』(ナカニシヤ出版、2012年、全290頁)

単著:栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』(未来社、281+vii頁:2011年)

小田部胤久(共著)『坂部恵—精神史の水脈を汲む』水声社、2011年、全350頁)

単著:山内志朗『存在の一義性を求めて』(岩波書店、2011年、全360頁)

山内志朗(編著)『イスラーム哲学とキリスト教中世(1理論哲学)』(岩波書店、2011年、全332頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

尾崎彰宏「北方画家列伝」がめざしたものの—ネーデルラント美術のパラダイム転換」(尾崎彰宏・幸福輝・廣川暁生・深谷訓子(訳)『カール・ファン・マンデル「北方絵画列伝注解」』(中央公論美術出版、449-512頁)平成25年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費))

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗原 隆 (KURIHARA Takashi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 30170088

(2) 研究分担者

加藤 尚武 (KATO Hisatake)

人間総合科学大学・人間科学部・特任教授

研究者番号: 10011305

座小田 豊 (ZAKOTA Yutaka)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 20125579

奥田 太郎 (OKUDA Taro)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号: 20367725

伊坂 青司 (ISAKA Seiji)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号: 30175195

山内 志朗 (YAMAUCHI Shiro)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号: 30210321

鈴木 光太郎 (SUZUKI Kotaro)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 40179205

宮崎 裕助 (MIYAZAKI Yusuke)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号: 40509444

松井 克浩 (MATSUI Katsuhiko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 50238929

佐藤 透 (SATO Toru)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号: 60222014

野家 伸也 (NOE Shinya)
東北工業大学・人間科学部・教授
研究者番号：80156174

尾崎 彰宏 (OZAKI Akihiro)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80160844

小田部 胤久 (OTABE Tanehisa)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80211142

城戸 淳 (KIDO Atsushi)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90323948

(3)連携研究者

()

研究者番号：